

午前零時の  
玄米パン

群ようこ



午前零時の玄米ハン

群ようこ

本の雑誌社



## 午前零時の玄米パン

発行 一九八四年七月二十日 初版第一刷発行

一九九五年四月十日 第十六刷発行

著者 群ようこ

発行 目黒孝二

印刷 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 本の雑誌社

〒164 東京都中野区南台四一五十二―十四 中野南台ビル

電話 〇三(三三二九)一〇七一 振替・東京五―五〇三七八

©1984 Yoko Mure, Printed in Japan

定価は表紙に表示してあります

ISBN4―938463―03―2 C0095

午前零時の玄米パン

## 目次

恋は野となり山となり

ムシロマフラーの熱い午後 8

鰯と鯖とソフトクリーム 21

化粧美人と脚線美 29

ふたごのおてもやん 38

ジんさんのピラミッド 44

低血圧二〇〇〇マイル

犬や猫が降ってくる 54

銀髪の吸血鬼 62

ハニワのテッちゃん 69

蛸の吸い出し 78

悪ガキ金次とデスマッチ 81

「りぼん」とか「なかよし」のこと 86

ピアニストを目ざせ 91

香水と口紅 97

もう私、デブでもカバでもいい 102

## 日曜日は本箱の整理

ポルノを読む 108

恋愛小説を読む 117

ハーレクイン・ロマンスを読む 127

午前零時の玄米パン

あしたも元気に養命酒

138

コンニャク嬢の醜聞情報

142

出版業界愛欲相姦図

144

経産婦の腹部波状攻撃

146

有閑デブの逆襲

148

小走り戦法の敗れた日

150

南極隊の謎

152

エレクトに消えた美少年

154

タンバリン女

156

ブランドの君

158

ポルノ観賞の夜

162

女子太生の真実 168

脱皮女の怪 175

白百合の失墜 180

ハネムーンの顛末 187

恐怖のバイナッブル・ヘアー

194

汗と憂いの日々

シェイプアップの日々 202

八百円で買った亭主 208

私の三十歳宣言 221

私の処女本タイトルは  
いかにして決定されたか

228



装丁 多田進  
装画 柳生まち子

恋は野となり山となり



## ムシロマフラーの熱い午後

大学三年の秋、私は学内事務所の掲示板の前でいつものように何か休講はないかと貼り紙をみつめていた。十数枚の紙が貼られていたにもかかわらず、私の授業に休講はなく、仕方なしに次の授業をうけるために中講堂へと向かった。出席をとりおわったら途中でぬけ出して家に帰って本でも読もうと思っていた。そのとき向こうから一人の男がやってきた。一瞬私は腰がぬけそうになった。後光がさしていたのである、いやそのようにみえたのだ。

「ひえーっ」

と思った。これはえらいことになったとうろたえた。珍しく一目惚れしてしまったのである。私にも赤い糸の伝説は存在したのだと確信をもった。それまでは、結ばれるべき男女の指と指とが生まれながら赤い糸でつながっているという俗説は、絶対私にはないと思っていた。自分の指についた赤い糸をずーっとたぐっていくと、先っぽに「スカ」と書い

た紙がぶら下がっているのではないかという気がしてならなかった。しかし今回はどういうわけか最初っから私はまいあがっていたのである。

それから友人の間に私のようすがおかしいという噂が流れた。キャンパスに出ればあたりをキョロキョロ、教室に入ればキョロキョロ、いつも落ちつかないからであった。

「お前どうかしたのかよ」

と神田君はいった。

「はっ……はあ、まあ……」

と私は口ごもりながら相変わらずキョロキョロしていた。

いた！

一番うしろの席に友だち三人といたのだ。私はうしろをふりかえったまま、

「あっ、いた」

と思わずいってしまった。神田君は、

「えっ」

と私と同じほうをみて、

「あー、そういうことだったわけね」

と行ってニヤリと笑った。

「珍しいねえ、キミが男のこというなんてさ、ブッ」

と行って笑うのである。私は大きなお世話だと思いつながら、少なからず心はときめいていた。

「あ、オレ、キミの初恋を実らす会っていうの作ってやるよ。まかせとけよ。これが最初で最後になるかもしれないんだから」

と突然いい出した。最初で最後になるかもしれないというのはちょっとひっかかったが、一回ぐらいやってみつかという気になった。それから神田君の活躍は見事で、私は彼に感謝せねばならなかった。所属学科、住所、氏名、電話番号はうに及ばず、父上の頭髪が薄く母上の電話の声がひどく色っぽいということまで調べあげて、図書館にいた私に報告してくれたのである。初恋を实らす会の会員は彼と同じ学科の女の子二人、サチコちゃんとヒトミちゃんが新たに入会し神田君のもとで秘密調査員として活躍してくれることになった。彼に関するデータを一覧表にした紙を私にくれた神田君は、

「もう告白するしかないんじゃないの」といった。

「めんどくさいよ、そんなの」

「バーカ、めんどくさいったってさ、みんなけっこうめんどくさいことやってんのよ。みんなね、相手を自分のものにするために必死に策略を練ってるわけ。待ちぶせしたり、どういうふうに誘おうとかさ、いろいろ悩んでるの。キミはさ、あいつと一緒に並んで歩きたいとかさ、ずーっとそばにいたいとか思わない？」

と神田君はさとすようにいった。

「そうねえ、そういうのもいいわね」

そう答えると神田君は急に険しい顔になり、――

「お前、一体何したいわけ？」

と問いつめるのである。

「そんなにだいそれた望みはもっておりません。今のところ姿をみてるだけでけっこうです」

というとき神田君は急にテーブルの上につぶして、

「あー」

と力なくいった。しばらくしてキッと顔を上げ、私に向かって、

「お前な、これからオレのいうとおりやれよ。オレは会長になったてまえ、この話をまとめないことにはどうにも気持ちがおさまらない」

ときちようめんな性格を丸出しにしていた。

「はあ」

と私は他人事のように聞いていた。何か面倒くさいことになってきたと思った。神田君は何が何でもまず自分の存在を相手に知らせよ！ という。それには何か物をあげるのがよいのではないかという提案をした。そういえば私はクリスマスとかバレンタイン・デーが近づくとも知りあいの女の子から男物のマフラーやセーターを編んでくれないかとたのまれ、彼女たちは私が編んだそのマフラーやセーターを、さも自分が愛情こめて編んだような顔をして目ざす男の子にあげて愛の告白をし、99%うまくいっていたのである。こんなことを人のためにばっかしやるのはバカげていると思い、すぐ毛糸屋に走って糸を物色してその日から狂ったように編み棒を動かした。現在私がどのような行動を起こしているかというのは逐一会長に報告することになっていたので、私は、

「今、わたくしマフラーを編んでおります」

と述べた。会長は満足そうに、

「そうそう、それでなくてはいけない。何事も苦勞なしでは実らないと思いなさい。あとは準備万端整えてあげるから」

と、いつてうなずいた。

私は家に帰っても必死にマフラーを編み続けた。だいたいマフラーというと一般的に初心者はゴムあみ、もうちょっと上手になると縄あみを配したりして差をつける。しかしこういうのは街でよくみかけるので、私はもっとオリジナリティーを追求して編み物の本からあれこれ悩んでやっと一つの模様あみを選び出したのである。どんな感じになったかと六十センチくらい編み上がったのを机の上に置いてながめた。それは毛糸の色といい編み方といいムシロそっくりだった。しかし私には時間がなかった。何としても十二月二十二日、休みになる前日に渡さなければならなかった。そのあとに二週間の休みがあれば、渡すときに恥ずかしくてもあとで何もなかったような顔ができるからである。私は試験勉強のときもこんなに必死になったことはなかった。神がかっているようだった。

そして二十二日の午前三時にムシロマフラーはできあがった。私は腫れたマブタをショボショボさせてそれをていねいに包み、机の上に置いて布団の中にもぐりこんだ。今日は大事な決戦の日である。今まで夜も寝ないで努力してきたことが今日一日で決まってしまう



うのである。そう思ったらだんだん目がさえてきてしまった。あせった。今日私は一生のうちで一番いい顔を相手にみせなければいけないのである。寝なければいけない、いけない、と思っっているうちに朝が来てしまった。私は鏡の前にとんでいて目の状態を点検した。私の期待とは裏腹に見事に目は腫れていた。

「普段より腫れてるじゃないの」

こんな大事な日に何たることか、とだんだん自分の思いどおりにならない自分の体に腹が立ってきた。私はマフラーの前でパンパンと柏手を打ち、それをかかえて学校へと向かった。

神田君は校門の前で待っていた。私の姿をみるとかけ寄ってきて、

「おまえ、ちゃんと持ってきただろうな」

と小声でいった。

「うん」

と私は答えてかかえていた包みをみせた。

「よしよし」

と彼はうなずき、